

# □ 声 楽

## 小 山 晃

2014年の声楽界も非常に盛んだった。新進気鋭の歌い手からベテランまで、それぞれが魅力的なプログラムでリサイタルの聴き手たちを愉しませた。例えば日本演奏連盟の新進演奏家育成プロジェクトでは、ソプラノ岩下晶子、メゾ・ソプラノ湯川亜也子、バリトン藤山仁志などがリサイタルをひらき、意欲的な歌唱で将来性を感じさせた。むろん今後の一層の研鑽も必要ではあるけれども、彼らはみな豊かな資質の持ち主とも感じられ、1年後、5年後どう成長してくれるか、大変楽しみでもある。

まだ寒風が吹く1月、今ではベテランの域に達している、鮫島有美子S、福島明也Brがジョイントでリサイタル（1月19日、調布グリーンホール）を行ったが〈日本の心のうた〉とした心なごむ歌の時。滝〈花〉の重唱からスタートし、〈荒城の月〉〈宵待草〉〈雪の降る街を〉など重唱、ソロとなじみの歌にも変化をつけ、特に鮫島が聞かせた前田憲男の長篇〈約束〉は、少年の健気な心情を綴って極めて感動的だった。

留学以来ウィーン在住で研鑽を重ねている小林沙羅Sだが、最近ではあちらとこちらの頻繁な往来で東京でも良い歌を聞かせてくれる。ドイツ、イタリア、日本の歌でのリサイタルは、小林の歌唱の多様なアプローチだった。（3月28日、紀尾井ホール）小林のリリカルで澄明なソプラノは微かな温みも湛え、抒情的な歌に優しみの感情が発揮される。シューベルト〈野ばら〉やモーツァルト〈すみれ〉、中田喜直〈さくら横ちょう〉トステイ〈ばら〉などが印象に残る。

ドイツ・リートの名手の一人、日比啓子Sリサイタルが名唱といえるひとつ。（5月22日王子ホール）日比は以前からそうなのだが、歌を愉しくうたい愉しく聴かす。この日もそれは変わらず、シュトルツのウィンナリートなど歌が喜び弾む。民謡〈君恋しい歌〉マラー〈この世の生活〉ブラームス〈聖なる子守歌〉そしてシュトルツ〈ウィーンは夜がいちばん美しい〉など抜群だった。

藤原歌劇団のオペラ公演で、多くのバリトン・ロールを歌っている須藤慎吾の初リサイタル（7月12日、王子ホール）。すでにキャリアの長い須藤だからリサイタルのひとつやふたつはひらいているだろうと考えていただけに、オヤとも思ったし、満を持して、とも思えた。オペラの本舞台では特にヴェルディで真価を発揮している。いま脂がのっている歌い手である。ドラマティック・バリトンといえる須藤だが、繊細な表現にも優れ、それがベッリーニ〈追憶〉〈苦悩〉に活きた。がやはりオペラ物がいい。〈椿姫〉ジェルモンのアリア〈プロヴァンスの海と陸〉、ゾルダノ〈アンドレア・シェニエ〉の〈祖国の敵〉で劇感情を見事に裏打ちさせた。

近頃コンスタントにイギリス歌曲、アメリカ歌曲を歌っているソプラノ佐竹由美のリサイタルが意欲的なものだった（7月22日、津田ホール）。彼女の〈英米歌曲シリーズ〉第4弾は「シェイクスピアの世界」。劇聖の詩作や芝居の名台詞に作曲した歌たちである。パーセル、アーjent、バーバーなどの作品を聞かせたのだが、1927年生れの、いわば現代イギリスのアー

ジェントの歌曲は初体験だった。57年作曲の〈エリザベス朝の6つの歌〉は、声のパートもピアノ・パートも、詩に則してハイ・レベルに書かれているのだが、佐竹は、いたってフレキシブルな声と高度な表現力で聞かせ、これは収穫だった。ヴォーン＝ウィリアムズ〈シェイクスピアの3つの歌〉も芝居の名台詞に作曲した作品で劇性豊か。佐竹はそこで歌を演じた。圧巻がバーバー〈アントニーとクレオパトラ〉の「クレオパトラの死」。恋人を失った悲痛さと自死の決意。出色の歌唱演技だった。

日本歌曲の達人のひとり関定子S独唱会が、歌い手も聴き手も関の歌の世界を愉しんだもの（3月8日、王子ホール）。とにかく関のテリトリーはまことに広い。ほとんど、行く処可ならざるはなし、といえるほどである。だがこの日は、いわゆる日本歌曲ではなく、〈庭の千草〉や〈旅愁〉のような外国曲に日本詩をつけたもの、メンデルスゾーン〈歌の翼に〉シューマン〈美しき5月に〉あるいはアダモ〈雪は降る〉、プレヴェール〈枯葉〉。モノ〈愛の讃歌〉などのシャンソン日本語版などを24曲歌ったのだが、歌の個性を活かしながらすべて関ぶしになっている。しかも歌の本質が逸脱していない。このひとの抜き出しにはどれほどの歌が詰っているのか、些か呆れた。

ベテランの一人、本宮寛子Sリサイタルも非常に見事だった（10月11日、王子ホール）。この日歌ったのは、日本歌曲とイタリア・オペラ・アリアだったが、ベテランの味をたっぷり堪能させた。長いキャリアの本宮が、いずれも歌いこみ自身の骨肉にしてきた歌たちである。山田耕筰〈唄〉からスタートした歌唱は、歌う悦びに満ちていた。〈からたちの花〉は情景描写に優れ、目前に白い花が見えるよう。そして芸格の大きなアリアの演唱。ドニゼッティ〈ルチア〉の〈辺りは沈黙に閉ざれ〉の迫真性もさることながら、圧巻は〈アンナ・ボレーナ〉狂乱の場。貴女がたは泣いているの〜。で始る長丁場で、正気と狂気を往き来し、ほとばしりする悲痛な想い。それはいたく感動的だった。

イタリアン・ヴォイスといえるプリリアントなテノールは益々磨かれ、歌唱表現は円熟の境地にある、福井敬Tリサイタル（11月1日、浜離宮朝日ホール）。また出色の歌の刻。前半を日本歌曲、後半をイタリアもので聞かせた歌たちは、すでにみな福井の手の内のものだけに歌唱には余裕がある。歌作りのスケールも貫禄である。感情は非常に豊潤であり、イメージーションがふくらむ。中田喜直〈霧と話した〉の抒情湛えた歌の演技、宮澤賢治〈星めぐりの歌〉の幻想性など説得力大。そしてアリアは声、役の表現が一段と輝いた。ブッチーニ〈マノン・レスコー〉デ・グリュエの〈見たこともない美人〉、〈西部の娘〉の〈やがて来る自由の日〉など劇感情がリアルに伝わる。ブッチーニの名旋律を歌うだけでなく、リブレットと音楽の写す感情が、彼の内で役割にすり変わる。やはり名歌手といえる。

2014年はR.シュトラウス生誕150年に当たっていた。この年もと僅かという時にシュトラウスの名歌たちを存分に歌ったのがソプラノ佐々木典子リサイタルだった（12月10日、横浜みなとみらいホール（小））。やはり巧い歌い手である。第1曲〈獻呈〉がひとフレーズ歌われたとき、あらためてそう思った。あり余るほどの声を自在にコントロールし、詩と音楽を深く詠いこんでいる。〈あすの朝〉〈憩え、わが魂〉そして〈4つの最後の歌〉などシュトラウスの名歌たちが、歌われ聴かれることに小躍りしている。〈夕映えの中に〉などひととき感銘ぶかかった。R.シュトラウス生誕150年記念にふさわしいリサイタルだった。